



平成26年版防衛白書の刊行に寄せて

防衛大臣

小野寺五典

今年、防衛省・自衛隊は、発足から60年を迎えました。昨年末に国家安全保障会議が創設され、わが国として初めての国家安全保障戦略とこれに基づいた新たな防衛計画の大綱(防衛大綱)と中期防衛力整備計画(中期防)が決定されました。さらに、国民の命と平和な暮らしを断固として守り抜くとともに、国際社会の平和と安定にこれまで以上に積極的に貢献するために、国の存立を全うし、国民を守るための切れ目のない安全保障法制の整備のための基本方針を本年7月に閣議決定したところです。発足60年の節目の年に、防衛省は新たな防衛力のあり方を実現するための第一歩を踏み出すこととなります。

防衛省・自衛隊の60年間の歴史は、わが国の平和国家としての歩みそのものにほかなりません。わが国は、国際協調主義に基づく積極的平和主義のもと、これまでの平和国家としての歩みを堅持しつつ、わが国の安全と地域・国際社会の平和と安定を維持していきます。

わが国を取り巻く安全保障環境が一層厳しいものになってきている中で、国民の生命・財産と領土・領海・領空を守り抜くための自衛隊の活動は、ますます重要になっています。私は防衛大臣就任以来、北は北海道から南は沖縄まで、できる限り多くの現場を訪問することを心がけてきました。また、昨年12月にはフィリピン、

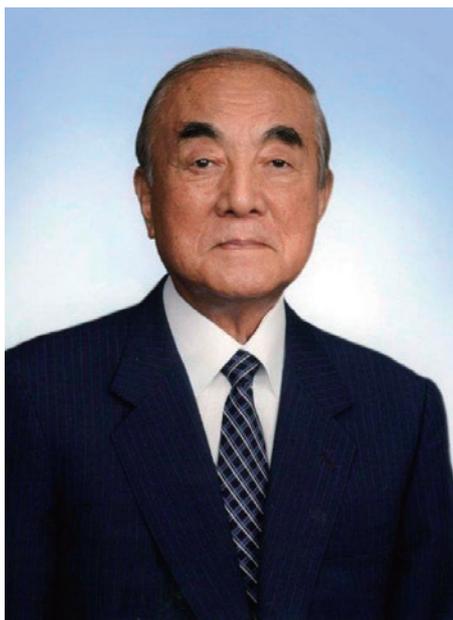
本年5月にはわが国の防衛大臣として初めてジブチと南スーダンを訪問し、国際緊急援助活動、海賊対処行動およびPKO活動に従事する隊員を激励してきました。自衛隊員は、過酷な環境下であっても規律正しく高い士気をもって真摯に任務に励んでいます。



この60年間で防衛省・自衛隊を取り巻く国内外の環境は大きく変わりましたが、その中で変わらないものもあります。国の防衛には、国民の理解が不可欠であるということです。まさにこの信念のもと、1970(昭和45)年に中曽根康弘防衛庁長官(当時)が防衛白書を創刊されました。1976(昭和51)年以降、防衛白書は毎年刊行され、今回で刊行40回の節目を迎えました。白書を毎年刊行して防衛政策を説明している国は、他にほとんど例がありません。防衛白書の刊行を積み重ねてきたことで、わが国の防衛政策の透明性は国際的にも高い評価を得ています。現状に満足せず、国民と世界中の国々からわが国の防衛政策をより良くご理解いただくために、今後も質の高い防衛白書を作成していきたいと考えています。

今回の防衛白書では、巻頭に特集記事を設け、防衛白書と防衛省・自衛隊のこれまでの歩みを振り返ることにしました。また、新防衛大綱で構築することとした「統合機動防衛力」について、分かりやすく説明するとともに、安全保障法制の検討などの新しいトピックについても記述しています。さらに、自衛隊をより身近に感じていただけるよう工夫しています。今回の防衛白書が一人でも多くの方々に読まれることを願っています。

(写真：フィリピンのレイテ島タクロバンを視察する小野寺防衛大臣)



防衛白書刊行40回に寄せて

元防衛庁長官
元内閣総理大臣

中曾根 康弘

私は、1970(昭和45)年1月から翌年7月まで防衛庁長官(第26代)を務めました。在任期間中に力を注いだものの一つが『防衛白書』の創刊でした。

私が長官に就任する以前から、防衛庁は白書の刊行を検討していましたが、日の目を見るに至っていませんでした。当時は、国民意識の中の厭戦感^{えんせん}や嘗て^{かつ}の軍隊のイメージもあって、自衛隊に対する風当たりがまだまだ強い時代でした。白書の刊行によって国会で野党の追及を受け、不必要な疑心を国民の中に招きかねないとして、庁内では白書の刊行に対する慎重な声^{こゝろ}が根強く、歴代の防衛庁長官にとって白書はある意味タブーのような存在でした。

私が白書の刊行を推進したのは、国の防衛には、何よりも国民の理解と積極的な支持、協力が不可欠であるという信念があったからです。そのために当時

の私は、「国民の広場」に防衛庁・自衛隊を持ち出すことで、広く国民の皆さんに、茶の間で防衛問題を議論していただきたいと思っていました。そこで、事務当局を叱咤激励し、私もペンを執って原稿を修正し、1970(昭和45)年10月20日、ついに初めての『防衛白書』が閣議で配布されるに至りました。

その『防衛白書』が刊行を重ね、今回、40回目を迎えました。この間、国民の自衛隊を見る眼も大きく変わりました。今となっては信じられないことかもしれませんが、初めての白書が刊行された当時は、国民の防衛に対する理解や意識も低いままに自衛官が大学への受験や入学を拒否されるというケースもありました。しかし、自衛隊が国の安全保障の最前線に立ち、防衛や災害救助に邁進するその姿を見て、今や国民からの信頼も厚い組織になっています。自衛隊を理解していただくために『防衛白書』を創刊した者にとって、この上ない喜びと申せましょう。

20世紀は戦争の世紀でした。21世紀にこの悲劇を繰り返してはなりません。現在、世界情勢は大転換期にあり、それに伴って安全保障環境も混沌を呈しています。こうした中で、わが国と世界全体の平和と繁栄を守るために、わが国の防衛政策はどうあるべきか。『防衛白書』を通して防衛問題を「国民の広場」で議論していただく必要性はその創刊当時と比べ、むしろ大きくなっていると言えます。国民生活の安心安全を図り世界と国の発展繁栄を希求する意味でも、多くの国民に『防衛白書』を読んでいただくことを願っています。
